

わ
涌く水を伏して見るらむ 酒蔵の
いづつ いずみ
井筒の泉 銘酒と変ず

さかぐら

令和四年師走十七日

大中臣正比呂



(贈歌男) つつみづつ
筒井筒 井筒にかけしまろがたけ

お
生いにけりしな 妹見ざるまに
いも

(返歌女) くらべこし 振分髪も 肩過ぎぬ

あ
君ならずして 誰か上ぐべき

右の歌は、年若き頃の在原業平の求愛の歌として「能」にもある。井筒とは井戸の地上部分を囲った四角の木枠のことであるが、井戸の水鏡に二人を写して遊んでいた、幼馴染みとの想い出が語られている。「上ぐ」とは髪を結い上げることで、結婚すると言う意味である。湧水にまつわるのは恋ばかりでなく、銘酒も然り。新春の御神酒としよう。